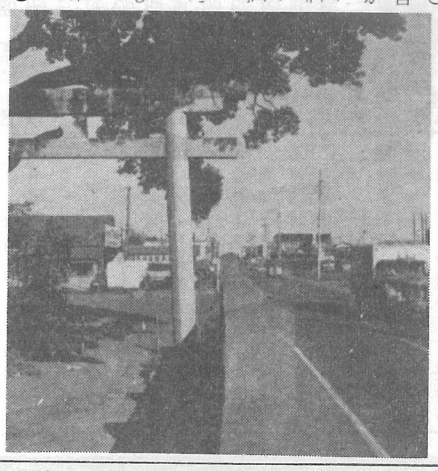
十年一昔（その二十四）

―琴平裏参道界隈―

給食センター小沢所長寄稿

いまから二十年にもなりましょうか、その頃学年末になりますと何処の小中学校でも学芸会（此の頃の様に文化祭等と呼んでいませんでした）が盛大に開催されていました。テレビも普及されていませんでしたのでおぢいさんやおばあさん方はこの催しも楽しみの一つで朝早くからお弁当を持って見物に出かけたものです。勿論家族の人達も大変な力の入れようで横芝小学校等ではPTAの会員まで出演してNHK頓智教室を公開？したりしたものです。その中で、「横芝の琴平とかけて何と解く」―初土俵のおすもうさん―「その心は―他人の褌で角力をとる―」というのがありました。琴平様が松尾町に鎖座在しますのに町並や駅の関係から四隣町村の人々には横芝のこんぴら様と言った方がわかり易く、また縁日等の商店街も横芝町の方が余分に恩恵を受けることを風刺したものでしょう。もっとも琴平境内の一部は横芝町地区に入っているということですしその玉垣には十七代横綱小錦八十吉等横芝出身の人名が数多く刻まれていました。その頃は役場前から琴平様に通ずる路は極めて狭い農道でしたが突当りは石段になっていてその上に裏門の鳥居が建っているいわば裏参道になっていましたから毎月の十日特に正五九暮の市の日には普男善女がこの農道にも列をつくって続いたものでした。石段を上り鳥居をくぐると社の裏庭でいろいろな碑が建っていてそれを取まく様につつじの株が沢山植付けられていました。中学生の中には登下校の途中このつつじの株にかくれて道草やお弁当を食べてしまう子供さんが先生を困らせたり、また書道を勉強している子供さんが碑の拓本をとらせてもらったりする等横芝の人々にはいろいろと想い出の多い場所でもあったのですが国道一二六号バイパスが琴平様の裏境内を断ち割って通過したいま、あの裏参道や裏境内に想い出を持つ人々の心の中には何時か松尾でも横芝でもなく、心の故郷としてのこんぴら様の裏参道が気憶に残ることでしょう。



◎写真上は昭和三十年頃のもので裏門の鳥居から横芝方面を望んでいます。鳥居のすぐ下は石段でそのまま横芝地域に入り役場前に通じていますしかし道は極めてせまく、両側の殆んどは畑でした。鳥居の脚の間には稲を架けたおだの柱が見えています。縁日の日には参詣人の群が三三、五五と此の道を通って来たのです。鳥居の右手に見える樹木の辺りはバイパスになってしまいました。

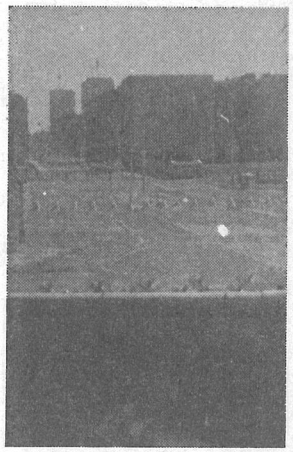
◎写真下は昨年（四六年）十二月のものです。上の写真で見えた樹木も更に右手に小し見えていた筈の碑もその姿を消して国道のセンターラインの白さと電柱が特に目につきます。そして走り去る自動車のスピードは世の変転を物語るようにも見えます。

（この稿取材に当り鳥喰沼の稲葉清子氏から写真提供をいただきました。特に書添えてお礼申上げます。）

ドイツ視察記（第四回）

伊藤一男

八月四日の正午、国境の河を渡る。パスはゆっくりと鉄条網の中を進む。武装兵に制止され停車すると、三十台程車が並んでいた。四時間ほど待たされ、東側兵による検査が始まる。一人ひとり旅券の写真と見比べ、所持金申請書をチェックする。検査はものものしい雰囲気で、車体の下やエンヂンルームまで調べる。五時やっと東独領にはいる。森と草地ばかりのアウトバーンを走り続けて、九時過ぎ再び検門所を通った。今度は婦人警官がいて三十分位で釈放（？）される。ベルリンの繁華街をぬけて宿舎につくと、着替えをして街にでる。国境通過の緊張と陰気な東独行から解放されて、今〃自由〃のネオンの輝きの中にいるのだ



ベルリンの壁

―悲しみの「壁」―

翌日はバスで市内を廻る。パスの上からではベルリンの笑顔しか見えない。博物館や美術館が多い。カイザーウイルヘルムの記念教会やティアガルテン公園・ポツダム広場女王シャルロットの城館などを見て、ポツダム・プラッ（旧繁華街）で下車した。戦争で廃墟と化したベルリンには遺跡は殆んどなく、高層ビルが林立し、奇跡の復興をとげている。だが郊外の〃壁〃の付近は破壊された建造物が未整理のまま放置されている「ベルリンの壁」は想像していたより簡単なもので、コンクリートの仮や廃屋となったビルなどで、高さ五メートル位だった。ほんの眼かくし程度にすぎない。壁のスキ間から東ベルリンがのぞける。TV塔や市庁舎などがよく見えて、クレーンが絶え間なく首を振っていた。悲劇のブランデンブルク門にたつと、壁によって友人・恋人・肉親を引裂れた人々の悲しみが迫ってくる。東西両陣営の厳しい対立の現状をこの眼で見て、人間（市民、国民）と「体制」のキシミを寒々と感じた。人間にとって「自由」がどんなに大切かを知った。このことを忘れまいと思った。